

セリオ便り

四月号



- 2021 -



大国主命の永遠の愛の思い出

■マークエスティル スキャルシャフィキ

おはな。秋田の桜は四月中旬から下旬が見頃のようですが年々少し遅くなっています。お元気でいたるところへ大好きな建築家、隅研吾氏はオリンピック競技場を担当されました。一方は難い。案件で絶対に無理という事故物件のほうは依頼に情熱を燃やして送り続けていました。天文学的。その考え方の基盤となるのは、ハブル山崩壊後の大年、即の数年全ての仕事を無くなり厳しい時代を乗り越えて来た事でも納得出来るのですが、コロナの波の華麗超越え方とは?。質問に「なぜ変化するのか、変化する理由とは」人間は酷い事があると変化する。酷い事か無いけれど、なぜか変化出来ない。謙虚になればいい」と結ぶんでしまった。建築家業とは今社会の先端を読み未来を考える仕事をやりたがります。

「賢は賢なりに愚は愚なりに才才なりに何十年と継続してけば必ずものになるものだ。別に偉い人には必ず必要はないが社会のどこにあっても、その立場立場においては必ずいる人には必ず何か結果を出さねばならない。」安國正義氏の人生アドバイスを一例においた言葉は、継続ける力でありに通じるものですが、自分の限界を考える時に誰かのために立つてこそ超えられていくものかわざります。

どんな仕事であっても働くとはそこに人とよりの貢献・人格の延長の投影され真摯に向こうとして耕され成熟していく。世界の変革期をむかえ価値観が変ゆるうとする。花粉にコロナ、黄砂も地球レベルの自然循環で、地球が丸いつの球体として宇宙に浮かんぐ。地球船である誰もが利己心のせいで生き延びる事が出来ば命がありません。この時代に生きて何を角付く。学びどこに何かうりか問われてもよろしく。断絶して生きる事に見える世界に人の持つ愛の力でつなげます。前進しますように愛の不足を日々自覚しながら今月も自入ります。

感謝を込めて。

敬意

令和二年四月廿四日

松本章子



「日本神話」第5巻・大国主の国造り

<http://marcestel.jp>

■マークエステル スキャルシャフィキ

1943年、パリに生まれる。1970年、大阪万博の時に初来日。京都清水寺で水墨画に魅せられ、外交官から画家への転身を決意。油彩で水墨画の「にじみ」の効果を出すための技法を研究し、西洋画と東洋画を融合させた独自の世界を確立する。近年、日本神話を題材に旺盛な制作活動を続けており、伊勢神宮、出雲大社を始め、高千穂神社、宇佐神宮など100余ヶ所の神社に絵画を奉納している。

日本をそして日本人をこよなく愛して止まないマークエステル氏は、絵本・日本神話の発行で、日本人の精神文化の根底である日本神話を永く後世に語り継いで欲しいと語る。



ひ
び
る?

私もシーツを見つけて作りました
表紙にストラップをしておいた
表紙にストラップをしておいた
九卅國立博物館にて
アメニョウ張り表紙がナコと似てますね
アメニョウ張り表紙がナコと似てますね